

(別紙様式 = 小学校用)

都道府県番号	2
都道府県名	青森県

【
*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	青森県青森市立造道小学校								
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	4	4	0	23	32
児童数	118	104	128	113	134	119	0	716	

研究の概要

(1) 研究主題

学ぶ知恵を身につけた子供を育てる学習指導のあり方

(2) 研究主題設定の趣旨

本校では、確かな学力を知識の量だけではなく、学ぶ方法や学ぶ意欲、学ぶ態度等を含んだ「学ぶ知恵」としてとらえ、その具体的な子供像を次のようにとらえている。 ・問題を発見する子 ・問題を解決する子 ・学んだことを生かす子 ・新しい考えや方法を求める子 ・試したり工夫したりする子 児童の実態に応じた教材の開発や指導方法・指導体制の工夫をし、指導と評価の一体化を目指した授業づくりをすることで、「学ぶ知恵」を身につけた子供を育てることができるのではないかと考え、実践を通して研究することとした。
--

研究の概要(選択した観点を中心に記述すること)

(1) 研究推進体制の工夫

研究推進委員会
研究主題や研究体制、研究の具体的事項等、研究の骨子に関わる内容について検討し全体に諮るようにした。構成メンバーは、校長、教頭、教務、研修主任、ブロック主任、家庭科・算数科主任。
ブロック体制
学校課題解明のためのブロック体制を研究にも生かし、ブロックごとに研究教科を決めて仮説検証を行った。その際、集中授業だけでなく、全員が仮説検証のための指導案を作成し、授業を公開して研究を深めていった。
中学校との連携
拡大校内研修会(国立教育政策研究所 木岡一明氏の講演) 授業参観や体験学習、学力分析や日常の学習態度に関わる情報交換をすることによって、小学校における指導の重点化を図り、連携を深めていった。

(2) 研究の実際

学力の評価を生かした指導の改善
* 診断的評価を通して
標準化された学力検査の実施、分析、指導の改善
事前に行うレディネステストによる実態把握
* 形成的評価を通して
子供の自己評価を生かした支援
授業(単元)における形成的評価を生かした支援

(3) 研究の成果と課題

【成 果】
診断的評価を通して
算数科においては系統性のはっきりしている教科であり、習ったことを使って問題解決に取り組むことになる。既習事項をしっかりと身につけているかどうか

か事前テストで把握することで、指導体制や指導方法の工夫を図ることができた。

例えば、既習事項の定着度が低い場合には、単元の導入場面に復習の時間を2、3時間設けた。また、毎時間、既習事項を確認してから問題解決に取り組ませるなど、指導計画の作成や指導法を工夫することができた。

そして、既習事項を生かした授業展開を心がけることで、単元終了後の児童の自己評価では、「わり算の筆算が自分でできるようになった」という満足感や成就感を一人一人の児童に持たせることができた。

[4年生 本時の学習で既習事項を確認してから問題解決に取り組ませた例]

復習コース

第4学年 算数科学習指導案

平成15年11月 7日(金) 3校時
対 象 4年 16名
指導者 武井 秀雄

「分かり方別指導 復習コース」

1 単元名 「わり算(2)」 (1/11)

2 ねらい

(何十) ÷ (何十) で商が1けたになる計算を10のまとまりとして考えることで、既習である1桁÷1桁の計算に置き換えて、九九を使って暗算で解くことができる。

【使わせること】 ○九九 ○わり算の意味(包含除) ○九九一回適用の除法 ・あまりがない場合 ・あまりがある場合 ○÷(1位数)で商が何十になる計算	学習過程	向き合わせ方 (教材、教材提示の仕方、発問、指示など)
	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・フラッシュカードを使って、九九や九九一回適用の除法について復習する。 ・プリントを使って、あまりのあるわり算について答えの確かめも含めて復習する。(5問) (例) $9 \div 4 = 2 \dots 1$ $4 \times 2 + 1 = 9$
	課題	80円であめを買います。 1こ□円だったら、何本買えるでしょう。

[4年生 わり算の単元終了後の児童の自己評価より]

項 目	1組	2組	3組	合計(%)
わり算の筆算がどんどんできるようになった	11	17	12	40
わり算の筆算の仕方が分かり、自分でできるようになった	16	12	12	40
時間はかかるけど、前よりも自分でわり算の筆算ができるようになった。	7	5	8	20

形成的評価を通して

算数科においては特に、自力解決場面で自分で間違いに気づいたときには消しゴムで消さず、×を付けて思考の跡が残るようなノート指導に取り組んできた。

その結果、個別指導において児童の思考の流れに沿いながら、つまずきに対して適切な手立てを講じることができた。

また、結果だけでなく、学びの過程を把握することができるので、個々について学ぶ方法や意欲、態度等を含めた評価ができ、指導と評価の一体化を図ることができた。

さらに、児童にとっても自分の思考の道筋が確認でき、どこでつまずいたのか、どうしたらできるようになったのが学習を振り返り、自己評価能力を高めることにつながった。

[3年生 児童のノートから]

11.27

① 5人 バス 90円
電車 70円

② どちらがどれだけやすい？

③

バス 90円
電車 70円

バスだったら ちがいは □円
 $90 \times 5 = 450$
 $70 \times 5 = 350$
 $450 - 350 = 100$ 100円(電車)

④

バス 90円
電車 70円

⑤
 $90 \times 4 = 360$
 $90 + 70 = 160$
 $160 \times 5 = 800$
 $90 - 70 = 20$
 $20 \times 5 = 100$ 100円

10.31

① 線分図にかいて、かくれた数をもとめよう。(何人帰ったか)

のこり 19人 帰った数 □人
全体 $14 + 8 = 22$

$14 + 8 = 22$
77人
男子 14人 女子 8人
のこり 19人 帰った数 □人
式 $14 + 8 - 19 = 5$ 5人 帰った

②

□人 14人 のこり 19人
のこり 22 8人
のこり 17人 □人
男 14人 女 8人

③ 全体のとのこりやり帰った数は
上と下に分けて線分図にかく。

少人数指導のよさを生かした指導を通して
きめ細かな目配り(評価)ができ、一人一人を授業の中で生かすとともに作業
的な学習をより多く取り入れることにより「勉強がわかった」という児童が増
えた。

【課題】

算数科において数学的な既習事項の定着だけでなく、各教科の学習を支える読
み、書き、計算の確かな定着を図るための全校体制での取り組みが必要である。
算数科においてノート指導を通して指導と評価の一体化を図ってきたが、それ
を他の教科等にも発展させていく。また、その他の評価方法についても検討し、
評価の信頼性や客観性を高めていく。

(4) 研究成果の普及の方策

平成15年 9月26日(金)東青管内小中学校校長研究協議会
「学力向上フロンティアスクール」の実施について概要説明
「学力向上フロンティアスクール」の中間報告として資料作成
地区の学校への配布
地区内の学校の要請に応じて「学力向上フロンティアスクール」の実施につ
いて概要説明

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7~12学級
 13~18学級 19~24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント】

- ・ 自ら学び、自ら考える力を身に付けさせるために、児童に「使わせること」「考えさせること」を明らかにしながら進める授業。